
ゴースト?ストリート?ストーリー

ミリウェイズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴースト？ストリート？ストーリー

【Nコード】

N5954I

【作者名】

ミリウェイズ

【あらすじ】

彼の名は八幡、高校二年生。彼は平凡ではなかったが平凡な毎日を送っていた。しかし、彼はトラックに轢かれて死んでしまった！しかし彼は目覚めると、幽霊となり、途方にくれている所に一つの出会いがある——これは一人の少年の死から始まった、「現世」と「死後の世界」とそこに住む人達と人外達の、笑いあり涙あり絆あり死あり生あり魔法ありバトルあり動物あり異世界ありのチャンプルー小説です。もし宜しければ読んでみてください。

000・平々凡々な毎日

000・平々凡々な日常

10月初旬。今日は秋晴れ、風が涼しい気持ちのいい天気だ。

こういつ日はどこで横になっても、ゆっくり眠れる。

しかし、俺は今眠ってもいなければ、寝っ転がってもいない。

では何をやってるかというと……

「あーもうぜんっぜんわかんね。俺リタイヤ」

俺は机に突っ伏していた。

「そんなこと言ってももう少しがんばろうよ八幡^{ヤハタ}」

「だけどよー、んなこと言ってもちよつと勉強したところでこの頭は良くならんぜ各務^{カカミ}よ」

「駄目人間の言い草ね、八幡。そんな台詞は10分以上勉強してからにしなさい。駄目人間」

「悪いのは俺だが…駄目人間って…」

「香椎^{カシイ}さん、容赦ない…」

「各務君は黙ってなさい」

ピシヤリと言い放って各務を一睨みする香椎。固まる各務。蛇とカエル？

「大体あなたは、人よりアレなのだからもう少し努力しないといけないのよ？」

「アレって何だよ！ぼかさずにちゃんと言ってくれた方がまだ良いよ！」

「1・無能。2・無価値。3・馬鹿。さて、どれだ？」

「一番マシなのは3だけど、己のことを馬鹿だと認める巧妙なトラップだ！」

表情を全く変えずに、言い放つ香椎。あんまりだ。勉強が出来ないだけでここまで言われなきゃいけない世の中なのか……世知辛い

……

「香椎ちゃん言いすぎだよ。八幡君可哀想だよ……」

「そうね、御免なさい花^{ハナ}。勉強を再開しましょう。八幡あなたも手を動かさない」

一転して花に柔らかな微笑みを向ける香椎。……扱いに差が無い
か？

「かーしいー。俺にも花みたいに優しく接してくれよー」

「イヤ」

即答で一言でにべも無い。つめたい…

「…一応聞くけど何で？」

「1・メリットが無い。2・あなたが嫌い。3・生理的に無理。さ
あ、どーれだ？」

「全部やな選択肢じゃねえか！三つとも嘘でありますように！」心
折れそうになる俺。

こいつと喋るには心を折られる覚悟をし続けなけりゃならんのか
…？この状況に俺死にたい。あと、個人的には、3が一番嫌だ。

●

俺たちは今、俺の家の居間で中間テストに向けての勉強をしてい
る最中だが、なかなか進まない。てゆうか俺が停滞の原因だし。勉
強わからねー！

右隣にいるのは俺より頭のいい各務。こいつは、いつも授業中は眠そうにしているのに、何故か俺より成績が良い！

しかも、この男、女性に少なからず人気がある。何でも小動物のようだとか保護欲を掻き立てられるだとか。

容姿は幼い顔立ちをしており、背も155位しか無く体も細身。

無表情でも微笑んでるように見え、うとうとしてるかボンヤリしてるかの違いしか無い毎日を過ごしてるので、女性陣には色々とされるがままである。

……男として色々言いたいことはあるが、本人は今の扱いが気にならないようで放っておいた。

が、それがいけなかった。

一度近所の痴女に襲われそうになった時には、流石に抵抗するだろうと思って見ていると、何時も通りに全く抵抗しないので、慌てて止めにいった。

その時にこいつは「いいかなって」とかなんとか言いやがった。

俺は呆れ、香椎は怒り、花は激怒した。「自分を大事にしてください！！」と大声で各務を怒っていた。これには本当に驚いた。花は怒らすと怖いんだな……

正面に居るこの香椎というのは、プロポーションも良く背は17

0位で、髪は黒のショートカット、少しツリ目だが整った顔立ちの麗人である。

だがしかし、その長所を打ち消してマイナスにするほどの罵詈雑言を吐き出し、その外見に惹かれた阿呆男共を斬っては捨て、また斬っては捨てる繰り返し。

賞賛（誤字に非ず）の無い無謀なチャレンジャーが50を超えたところで、このままじゃ逆恨みの連中に何かされる思って、俺と各務で香椎の説得しに行った。

「フン、私にそんなことを心配するのは、もはや侮辱よ」……などとのたまったあと香椎は自分を守らせている集団が居ると言う。

それが詳しく聞いてみると聞くも涙、聞かせるも涙。最初に振られた男が、香椎が振り続けるのを見たときこのままじゃ、香椎さんに被害が！と思い。俺達のように香椎の所に行ったが当然ダメだった。

それで思いついたのが護衛団と言うことらしい。構成員は全員振られた連中だそうで、この連中曰く。

「香椎さんは人類の宝だ！」「あの子は天使だ」「不逞の輩から護らねばならぬ」「振られた連中にフロロしとけば面倒は無くなつて来るからな」「もう一度酷い台詞を言つて欲しい！！」「彼女を守っているというだけで、幸せだ！！」とのこと。情けないやら、潔いやら…

そんな感じで、香椎はいつものように振り続けたもんだから、仕舞には、中学生、他校の生徒、大学生、社会人、ヤクザ、公務員（

せんせい含む）、悠々自適のご老体まで老いも若いも、のべつまくなし愛の言葉（大半が気持ち悪い）を紡いでいった。

その全てを、この女は。

時に、一言で一刀両断に。

時に、長々となます切りに。

時に、コンプレックスを一突きに。

時に、根も葉も無い悪口をまくし立て微塵切りりに。

相手を見て、もつとも効果的かつ残酷に、心に致命傷を与えると
言う血も涙もない方法である。神よ！人類にこのような試練は重
ざる！あんたは悪魔か！

しかし、俺はコイツに告白どころか、恋愛対象としてすら見てい
ない。じゃあ何故このような言葉のナイフで、やたらに傷つけられ
なければならないのか。人生は不条理だ。

そこで、左隣に居るのが花。こいつは香椎と正反対の穏やかな性
格と雰囲気を持ち、淡い茶髪の長髪で、ちっちゃくて可憐な少女と
いう言葉がぴたりと合う女の子である。

しかし、ぶっちゃけ俺はこいつの事をよく知らない。

前述の 痴女の変 では大声を出しているのが記憶にはある。だ

けど、それだけなのだ。

香椎とはよく話しているのは見ているのだが、俺と話するときだけは口数が少なくなる。

口数の少ない各務でさえ話しているというのに。俺はアレか、女子に嫌われているのか……

俺。香椎。各務。花。この4人のいつもの心穏やかな日常的一幕……の筈なんだが、なんだか最近、俺心に多大なダメージを食らい過ぎてる気がする。

主に香椎から。俺はここ2年、あの口の悪い女に攻撃を食らい続けているのだが、最近は特に酷い。何でかは知らんし、知っても傷つきそうな気がするから聞けないが……

●

「お前さ、いーかげんにしとけよ？その口の悪さ本っ当に直した方がいいぞ。そんなんじゃ恋人もできねーぞ？」

その時、まわりに居た花と各務の2人が凍った気がする。…アレ？…地雷踏んだ？……

「そうねえ。あなたの言う通りねえ。反省しなくちゃいけないわねえ？」

な、何だ。何だ何だ。何だこの猫なで声！何だこの顔！何だこの威圧感！！

怖い！！美人が怒るとホント怖い！！い、いやここで退いてはダメだ。ここで退いたら男じゃねえ！

冷静に、冷静に、冷静に——コイツがやってる悪口のように冷たい感じで——！

「香椎は普通にしてれば、かなりの美人だからな。ついでにへそ曲がりで根性曲がりの性格も矯正しちまえよ。したらカンペキ美人誕生！みたいな？」

若干腹立つ感じで言ってみた。さあ、どうくる！！！！

……うつむいてしまった……顔を赤くして小刻みに震えてしまった……え？何コレ？

「あ、あの香椎さんや？」

ポタツと机に、涙が落ちた。

「どあぁっ！？　な、泣くなよ！！」

激しく狼狽える俺。そ、そんなに悪いこと言ったのか！？

「な、なあ、俺が悪かった！だからこの通りだすまん！！」

俺は言葉を言いきる前に土下座の体勢になっていた。

無言が続く……

5分経過……

無言が続く……

10分経過……

無言が続く……………

15分経過……………

な、長い！沈黙が長い！この体勢でじっとしてるのもキツイが、沈黙のままというのはそれ以上にキツイ！

そばにいる2人は端っから助ける気がないらしく、カリカリとシャーペンの音が聞こえて来るだけだった。とはいえ、こちらから頭を上げる訳にはいかず、この状況に耐えるしかなかった……

俺が逡巡してるうちに「ふふふふ……」と香椎さんが笑っていらっしやるのが聞こえた。

「まだ気付かないのかしら？」

！まさかつ！俺は素早く立ち上がって香椎を見ると、心底嬉しそうな顔の横に目薬を持った右手が見えた。

「畜生オ！またやられたああ！！」

そうなんだ、御察しの通りこの手で3度騙されていた。俺どころじゃ単純なんだよ！！

「因みに、先ほどの見事な土下座は、このカメラでがつつり撮ってるわよ？」

「何い！？」

見ると左手にビデオカメラが握られていた。

「てつめ！消しやがれ！！」

「あら、そんな口利いていいのかしら？実は前回の奴も消してはいないのよ？」

「！やっぱりか！どうも素直に消したと思ったたら！」

「だからさっさと言う事を聞きなさいな。今ならまだ傷は浅いわよ？」

そう言つて、薄く冷たく笑う香椎。この女はいつか天罰が下るぞ！
ていうか下りやがれ！！

「つていうか、断るに決まつてるだろが！！何だ絶対服従契約つて！！」

「貴方の様な無用な人間に役割を与えているのだから感謝してもいいぐらいよ？」

「俺を生きてる意味が無いみたいに言つてんじゃねえ！！後、感謝もしねえぞ！！」

「全く、貴方はいつになったら自分の生きてる意味に気付くのかしら？」

「少なくともお前に服従する以外の人生には有るぞ！香椎！」

……本当に少しは優しくしてくれてもいいんじゃないかな……？
そしてその場に引つ繰り返る俺。

勉強どころではない。心が折られた気がする……

……どうやら八幡は寝てしまったようね。この八幡というのは、かなり打たれ強い男だ。私の言葉ですらなかなか陥落しない。

私は香椎。自分で言うのもなんだけど、かなり美しい方だと思ってるわ。

そのおかげで阿呆な男共が寄ってきて鬱陶しい毎日を過ごしていた。

しかしこの人は、そういう阿呆な男共と違って、極々普通に、呼吸をするかのように普通に、私に話しかける数少ない男の人だ。

だからだろうか。私はこの人に惹かれている様なのです。

最初は、この人の持つ空気や雰囲気は私には心地よくて一緒に行動しているのかと思っていたけど、どうやらそうではない様なのです。

八幡は、背は私より少し低いけど顔はきりっとしていて美形だし、体も外見からでは分からないが確りと筋肉がついていてバランスの良い体型をしている。

しかし、私が振ってきた男達の中には八幡より、背が高かったり、美形だったり、筋肉質だったり、いっぱいいた。

でも、私はそんな男の人達より八幡と一緒に居たいと思っています。

……………それなのに、八幡は私の気持ちに応えません！八幡のばか！私の気も知らないで！！

大体八幡は乙女心というものが分かってないんです！さっきの酷い台詞だって目薬を仕込んでいましたけど、ちょっとウルツと来てたんですよ！

……………でも美人って言われたのはちょっと嬉しかったり……………

でもこのままじゃ進展が無いと思い、少し前ぐらいから助言通りに攻めて攻めて攻めまくっている。でもやっぱり効果が無いのは何でなのよ！

はあ……………もうやめようかな……………でも……………好きなのよ……………
……………やはた、一緒にいたいよう……………

●

僕は八幡がすっかり眠りこけているのを見て。香椎さんに話しかけた。

「香椎さん、もう少し攻めろとは言ったけど方向性が違う」

「……………」

僕がそう言っていると彼女は少し目を吊り上げた。

「そつだよ香椎ちゃん。好きな相手にあんな事言っちゃ駄目だよ?」

「……………で、でもね花」

「言い訳しないの」

そう言いニツコリ笑う花ちゃん。

香椎さんは、顔が苦々しげになりながら困っている。香椎さんは花ちゃんには弱いのだ。

香椎さんという人は、一見凛々しく格好が良いという風ではあるけど実はとても恥ずかしがり屋のかわいい女の子なのだ。

「だ だって……………!は 恥ずかしいし……………!」

ほら、かわいい事言ってる。仮面も剥がれかかっているし。

「香椎さんは難儀だね」

「もうちょっと素直になっていいのにね?」

笑いあう僕と花ちゃん。香椎さんは顔を仄かに朱に染め、所在無げにもじもじしてる。

●

これが僕各務の日常。2年前から続いてる、この4人の日常。

たぶん明日も同じような日常だろう。

明日は何をしようかな？

001・平々凡々な通学路

001・平々凡々な通学路

今日も空は透き通るように雲ひとつ無く、少し肌寒くなったが日が照っている昼間ならよく眠れそうな、カラッとした良い天気である。

俺は今、ここ一年半通った学校への道にある微妙な感じの商店街を、ダラダラ歩いている。

テストも昨日で終わり、今日はただひたすらに、だるいだるい。因みに2週間前の勉強会は、全く成果が無く、テストの出来はとも芳しくない。

教えてくれた皆には大変申し訳ないが、俺の頭は記憶するということをしないのだよ。ははははー……………（泣）

このまま這いつくばったような成績を続けていたら、留年ダブリを先生に宣告されてしまう。いや、下手したら退学リストラ勧告と言う憂き目に会う可能性大。

おお神よ！この場合はアンタが悪いのか！それとも俺が悪いのか！責任は折衷案で半々だ！それならやっぱり俺が悪いのか！チクシヨウ！！やっぱりお前は悪魔か！！

俺が神への祈りを捧^{もんく}げていると。

「……八幡、貴方頭は大丈夫？なんならイルカの脳と取り替えてあげましょうか？」

絶対零度の温度の声と共に天敵がやって来た。今日は割と本気で怒っているようで、声のトーンがかなり低い。

怒っている理由は分かってるし、100%俺が悪いのも分かっている。だから、こいつの罵倒にも耐えねばならない。でも、もう心折れそう……

「……俺の脳はそんなに、酷くない……」

「酷いわよ？私がこんな優しい言葉を掛けるくらいには」

お前の優しさで、胃の中が焼付いてきたよ……

「……ていうか、おはようとか言う一般的な挨拶位しようぜ香椎……」

「そんなことは、どうでもいいのよ」

「いや、大事だろ。一日の始まりは……」

「黙りなさい、蚤の脳が」

迫力満点のドスの効いた声と香椎の憤怒の表情は人をここまで人を凍らせられるものですね。

後、蚤って脳あるのか？

「夏休み前の貴方のテスト順位、下から何番目だったかしら？」

「じゅ、18番目」

ちなみにうちの学校は平凡な公立高校で一学年250人だ。つまり、232位。いや、酷いとか言わんといってくれ、人に言われるとなかんずく凹む。

「それなのに、貴方は貴方の為の勉強会をすっぱかして挙げ句ずつと眠りこけていたとは、どういいうつもりかしら？」

香椎は仁王立ちでそんなことを言う。かなりお怒りのようで後ろに阿修羅像が見える程だ。2体共だ。

……………逃げたい……………。

……………でも、まあこれは言わないとなあ。流されたらどうしよう……………

……………

「ほ、本当に悪かった。あ、あのなアレには理由があつて…」

「黙りなさい、貴方の愚にも付かない言い訳なんて聞いたら、耳に蠅が集って耳の中から蛆がわくわ」そう言って香椎はスタスタと歩いていった。

……………こいつのこと本当に人間として認識していいのだろうか？ドS星雲から来たドS女王だって言われても納得できる。

それでも俺は、香椎を追いかけてながら話しかける。別れを告げに。

「ちょっと待て、話を聞け」

「イヤよ貴方のような雑菌の話なんて聞きたくない」

「俺雑菌かい！！ってそうじゃなくて！」

香椎は、俺のツツコミを無視して、尚もスタスタと歩く。

「待ちやがれ！」

俺は、香椎との距離を詰めて、

「学校辞めるんだ！」と、放った。

その一言で、香椎はピタリと立ち止まりゆっくりとこちらを振り向いた。

「……何ですって？」

「言つとくけど本気だから、自主退学」

真っ正面から、睨むように俺を見る香椎。瞳の奥の深い赤が更に濃くなった気がする。

「……どういうことよ。説明しなさい」

俺は、フウツツと息を吐き、軽く気合いを入れる。

「ウチの道場を継ごうと思ってんだ。じいさん達にも許可は取った」

ここでいう許可とは、うちの道場の兄弟子3人と親父とじいさんの、計5人の勝負を5人連続で全員打ち負かし、なおかつ実力だけではなく道場を継ぐに相応しい人物であると道場の人間と師範であるじいさん、師範代の親父と家族、つまり俺の家族の母さん兄貴妹の全員に認められれば晴れて、師範に成れるという、並外れたものではあるが、由緒ある厳かな儀式なので、とても体力を消耗したのだ。

具体的に言うと、師範・師範代・兄弟子3人（兄貴2人に元ヤン1人）と全身全霊の戦いで力を認めさせる。

なおかつ、その場にいる全員の“上に立つ人間”かどうかを判断するのだ。判断基準は個人個人が決めていいそうで、1対1で面接のようにするものだ。

しかし、ほとんどが年上なので内容が変わっても年上ってだけでも緊張するうえ、品定めされるような視線に耐えねばなら無い。

……途中何度か意識が……死んでもおかしくなかった……

それはさておき、学校のほうは、ぶっちゃけるとさっきの成績が悪いと言っ理由だ。

「もともと、高校も入るつもりもなくて、中学出たらじいちゃんのだ場継ぐ修行しつつ、バイトでもして生活費入れようってぐらい思ってたからな」

断っておくけど、道場を継ぐのも学校を辞めるのも、今すぐってわけじゃない。道場を継ぐには俺はまだ若すぎて、成人するまで修行を続けるつもりだ。

学校の方も、今すぐ辞めるのは嫌だし、いや、皆まで言いなさんな。あの3人と馬鹿していたいなんて、恥ズイじゃないですか。

とにかく、学校行って先生に今年の卒業まで居させて下さいってお願いするつもりだから、聞いてくれるといいが、こーゆー場合どうなんだろう。

「……何で言わなかったのよ……」

「いやーそれが、うちの道場継ぐのに儀式があるんだけどよ、その儀式つーのが急に決まってな」

あははーと、笑ってごまかす。いやまー、こっちも言いたかったけどテスト前に動揺さすのもねえ。

それに儀式前で準備とかあったし緊張もしてたしで、連絡する間もない状況だったんだけどな。

「そんで、一昨日すっぱかしたのは儀式やらその後の宴会やら後始

末やらで滅茶苦茶疲れてて、布団に入って起きたら真夜中だったっ
つうハナシで……………香椎？」

いつの間にか、香椎は、こちらに背中を向けていた。その姿はち
いさく、泣いているようにも見えた。

「……………何で……………」

香椎は、小刻みに震えながら、良く響く怒声で言葉を吐き出した。

「何で私達に相談も無しにそういうこと決めるのよっ！」

「うえっ！？と、とにかく落ち着け」

「私は落ち着いてるわよ！そもそも何でそういうことになったのよ
！説明なさいよ！」

「い、いや、その、ウチのじいさんと話し合ってな……………」

002 非凡な人生の岐路と終い

002 非凡な人生の岐路と終い

■●

家のじいさんというのは、一言でいえば丸坊主で髭がワシヤワシヤ生えている筋肉である。筋肉髭達磨じじである。いつかじいさんが「わしは、人間じゃなくてただの筋肉じゃ」と言われたって信じることができる。それくらい筋肉だ。

そんなじいさんがちよつと前に、俺が勉強している所へこんな言葉を投げかけた。

「よう、クソガキお前テスト成績最下位だったそうじゃあねえか」

……………このじいさんは、日本人の美德とされる遠慮やら深慮やらを捨てて、変わりに不躰や無遠慮を手に入れてしまったようだ。

おまけに悪知恵が働き口が悪い、だから口喧嘩では勝てたことがない。

それをみて一度、口汚い^{ダイティイ}対決^{バトル}つてのをしてみたことがある、ルールはバリートウッド、つまりは何でもアリ。で、じいさんvs香椎の勝負は。

『この老害が。さつさと灰に成りなさいな、このカラ脳筋肉キモグロ爺』

『ほお、言うじゃねえか阿婆擦れ。なら、こっちも。あんたはウチの孫に〜』

『?!そ、それを出すのは卑怯よ!反則よつ!~!』

『あんたが〜ウチの孫に〜ある感情を〜』

『ま、まま参りました。だ、だから止めて...』

という、スピード勝負があつた。あの時じいさんは何を言おうとしたんだろう、...気になる。後で香椎に聞いてみよう。

因みに、花vs・各務というのも、やってみた。こちらが、その光景。

「こんにちは、花ちゃん」

「こんにちは、各務くん」

「どうしようか?」

「それじゃあまず私からね?」

「うん」

「ロリコン」

各務の悲しそうな顔 各務に5のダメージ 花の心に罪悪感で10ダメージ

「見てて滑稽」

花の悲しそうな顔 花に5のダメージ 各務の心に罪悪感で10ダメージ

「不能」

各務の顔から一滴の涙 各務に15ダメージ 花の心に罪悪感で3

0のダメージ

「不細工」

花の顔から一滴の涙　花に15のダメージ　各務の心に罪悪感で30のダメージ

「どーてー」

各務は顔が固まったままに泣く　各務は45のダメージ　各務は瀕死だ！！　花の心は罪悪感で90のダメージ！！　花は致命傷だ！！

「幼児体型」

花は膝から崩れ落ちポロポロと泣いている　花は45のダメージ
花は瀕死だ！！　各務は心に罪悪感で90のダメージ！！　各務は致命傷だ！！

余りにもあんまりな、その光景に居たたまれなくなり、俺と香椎は飛びついて、強く強く強く、抱きしめた。そして、俺と香椎もポロポロと泣き出した。

「もういい……！もう止めていいんだ……俺らがついてるから……
………！」

「そうよ私達がいるわ。もうこんなことなくて良いの、しなくて良いのよ花」

美しき友情の涙を、4人で流していると、一部始終を見ていたじいさんが呆れかえった様子で。

「なんだ、この茶番！？」

..... スイマセン、話が逸れすぎました。

■●

「..... 最下位じゃねえ、232位だ」

「酷えって事は変わらねえんだから同じこつた、誤魔化すんじゃないえ」

「.....」

「ケ、だんまりかよ。情けねえなあ我が孫よ、オイ」

「...分かってるよだからこうして勉強してんだろ」

「努力してる結果がコレか？」

..... 俺は俯いて黙るしかなかった。

「..... お前が努力してるのは知つとる。が、はつきり言つぞ、無駄だ」

一瞬で頭が沸騰した。

「んだとじじい……！」

「お前が一番知ってんだろぅが、無駄だと」

言葉に詰まる。ここ一年の成績を見るまでも無く俺の成績は悪い。高校に入るのも滅茶苦茶に無理をしてギリギリだった位だ。

「けど、無駄って事はねえじゃねえかよ！」

俺はブチ切れて、じいさんに飛び掛り拳を突き出した。だが。

「馬鹿が、そんなガチガチのパンチなんぞ、蚊あ叩くよりも楽に避けれるわドアホ」

じいさんはヒョイヒョイと避けて、さらに言葉を投げかける。

「大体テスト3日前から徹夜し続けて勉強する馬鹿が何処にいる？ 挙げ句成績がアレって、もう決定的だろが」

怒りにまかせて、拳を繰り出し続ける。

「うるせえっ！それが実の孫に言う台詞かよ！！」

俺はじいさんに拳を振り続けたけど、一発も当たらない。

「言わなきゃわからねえじゃねえかよ！馬鹿が！」

「うはっ！」

じいさんは軽々とかわし続けていたが、じいさんは目つきが変わり、腹を一発殴る。本気ではなさそうだが俺は地面に這い蹲る。70過ぎのじいじじゃない。超痛い。くそつたれが。

それでも、俺は立ち上がった。まだ一発も食らわせてない。

「……………なあ、お前よお。みんな心配してんだよ無理してんじやないかってな」

「……………」

「お前が学校が楽しいって気持ちは判る。だがな無理しても良い事なんかねんだぞ？」

「じいさん……………俺、あそこに居てえんだよ！」

「……………」

「香椎に毒吐かれたり！各務に迷惑掛けられたり！花に癒されたり！部活の後輩の面倒見たり！担任からかって遊んだり！」

俺は、ふらつきながらも心の内を気合を入れて話す、じいさんは仁王立ちのまま黙って聞いてくれている。

「俺は今、学校が楽しくてしょうがねえんだよ！！！」

「……………だけど、それでもな」

「うるっせえ！！黙りやがれ！！！」

俺はじいさんの声に遮る様に声を出す。

俺は、じいさんに突っ込んでゆく、型も何も無いただの特攻だ。

「がああああああつー！」

「この・・・大ばか者がー！」

このときの殴り合いの事を、俺は良く覚えてない。じいさんが言うには、俺がじいさんに突っ込んで殴ろうとした瞬間、腹を思い切り蹴っ飛ばし意識が飛んだ。

俺は、一撃で気絶させられたとき気がついた。

月並みだけど、努力じゃどうにも成らない事があるんだな、そう思った。

●

「んで。その後、家族会議で俺を含め全員が、学校やめることに賛成した」

「……………」

「それで、じいさんが『退学ついでに本格的に、道場継げー！』って言い出して、皆もすげー乗り気でさあ。」

「……………」

「そっからは、あれよあれよという間に事が進んじまって、気が付きや儀式前。よーやくそこで、お前等のこと思い出したっつー訳で」

「……………」

「イヤーホント、悪かった。まさかこんなことになるとは思って無くてな」

腰を直角に曲げ、両手を合わせ前に突き出す。

「この通りだ、何でもするから、許してくれ！」

「……………」

……あれ？さっきのあのテンションはどこえやらの沈黙。いつもの香椎らしくない。

！さては！いつもの罵詈雑言が嵐のように襲いかかって来るのかっ！？それともあっさり『そう』とか言って流されてしまうのか！？

あんさー　ぷりーず　みー　かしー！

「……………八幡」

その時、俺達が歩いていた歩道に車が突っ込んで来たのが目の端から飛び込んで来た。

俺は、車の直線上にならない位置に香椎を思い切り突き飛ばした。

俺は、車と正面から向き合いぶつかってはねられた。

この時、運転手の顔を始めとする様々なものが見えた。

恐怖か戸惑いかは知らんが、運転手の歪んだ顔。

普段の風景の、犬を散歩させてるおばさん。通学中の同じ学校の生徒。まだこちらに気付いてない。

そして、香椎の顔。

何だあれ？あんな顔初めて見る。あんな顔。

- - - - - 涙とか - - - - -

こうして、俺は死んだ。享年17才。最後の視界には友達が泣いている光景が広がった。

その日、俺の事故のニュースが流れた、3分も掛からなかったそ

う
だ。

003・非凡な世界で起床と出会い！

003・非凡な世界で起床と出会い！

目を開けると知らないベッドで寝ていた。

通学路で事故にあつて、私服のままベッドの横になっていた。
(ちなみに、八幡の学校は私服登校です)

.....俺、助かったのか.....

もう絶対死んだっ！と思つたのにな。血の海もやたら広がつてたのに.....

てゆうか、この服ぐらい、着替えさせてくれてもイイじゃないかよ。

そういえば、香椎は大丈夫か、車が来ない場所に、突き飛ばしたけど怪我して無いよな？うあああ何か心配になつてきた。

「ん？」

何か違和感がある。音もしないし、気配もないし誰もいないみたいだけど、変な感じがする。

とりあえず、ベッドを降りて辺りを探してみる。うん、病院用のベッドだ、変なところはない。

部屋も普通の4人部屋、個人ごとに仕切り代わりのカーテンがあり、ベッドの隣には簡単なロッカーに棚が付いたものがある。窓の外の風景も別の病棟らしい建物が建っている。

庭も木が何本か植えてあるだけの平凡な風景だ。

違和感の正体に全く気付かないでいると、別の違和感に気が付いた。

俺、起きたばかりなのに、何でこんな頭ハッキリしてんだ？しかも体の調子も良い。

俺は、酷い低血圧で朝の通学では、ぼんやりし続けていて、通学時の記憶がぼけないくらいだ。

……………少し動いて見ようか？……………。

正拳を1発2発。ハイキック、ローキック、ハイキック、ローキック。そして回し蹴り。

……………なんか……………絶好調……………何で？

っていうか、こんな暴れたら、看護婦さん来る。いや、今は看護士さんか。

しかし、待てど暮らせど、来る様子がない。どういつことだと考えていたら、違和感の正体に気が付いた。

俺は、違和感の正体を確かめるため、廊下に出て病院の中に有る物を物色しだした。

暫くこの階を調べてみたのだが、他の部屋にも、誰もいない。いや、それどころか、病院には在るはずの物、医療器具や薬品関連の物が一切無いのだ。

どういうことだ？ 廃病院か？ いや違うあまりに綺麗過ぎる。テレビの企画とか見てると、ガラス割れてたり、書類散乱してたりするもんな。

全くと言って良い程、ベッドや窓や床に、埃や塵一つ無い
全くと言って良い程、人の気配や動きや温度が無い
全くと言って良い程、治療していた痕跡が無い。

……これはアレか？ 隔離病棟？ それじゃあ、何で俺一人？

街ぐるみでの虐め？ そんなワケないか。

あー駄目駄目。ぜんっぜん、わかんねえ。

しばらく病院の中を何の当てもなくブラブラ歩いてみた。すると、廊下の先に扉があり、庭に通じていた。

俺は、ベンチに座り状況の整理。

どういうことだろう、ここは病院じゃないのか？でも、ベッドがあったし、やたらと綺麗だったし。でも、病院っぽい雰囲気ではあるんだよね。

それより俺どーなったんだ、ぶつけられたんじゃないかな？でも、体には何処にも悪いトコは無いし、傷跡も無いのはおかしくないか？そして何故だか絶好調。

あーもー、解らん！とベンチで横になる。こういうときは寝る。その内誰か来るだろう。

ああ……………いい天気だあ

うとうとーと微睡んでいた時に、八幡の脳裏に映画とゲームの影。その時、唐突に閃いた！

コレはまさか！このシチュエーションはまさか！！

『バイオ●ザード』！または『2●日後』！！

思わず、がばっと起き上がり、

「やべえ！ゾンビの襲撃に備えないとヤツらが来る！」

「あははは。ちがうよ？」

「！？」

突然、後ろから愉快そうな声がした。びっくりしつつも、起き上がり振り返ってみる。

そこには、愉快そうな顔でこちらを見る、髪は真っ白ショートボブ。驚くほど整った顔のぱっと見14才位の……女子？……

……男子？……いや女子か？

性別の事は、まあ置いといて愉快そうな感じで、コッチを見ている。と、

「やあやあこんにちは僕の名前はアンセルっていうんだよろしくお願いねそれにしてももう動けるんだスゴいねえアーチーの時は意識戻ってから2日もかかったのにキミは1時間前に運ばれてきたのにもうそんなに動けるんだあスゴいなあところで色々混乱しているみたいだけど何か質問はある？」

一息で言い切りやがった。どんな肺活量だよ。ってか、良く見りゃ小っちゃ！150ぐらいしか無いこの体の何処に空気が入ってた。

「そんなに、いっぺんによく喋れるな」

「うん、肺活量には自信アリ！」

ちっこいのが、サムズアップ。

「へー、ちっちゃいのにすげえな」

「っていうか、最初に質問するのソレ？」

「ああ！そうだよ、何アホな質問してんだ俺！」

「キミはアホなんだねー」

「うるせえよ！」

「あはははは」

笑ってやがります……そうだ、さっきあまりの早口で聞き逃したことを聞いてみよう。

「お前、名前なんだ？」

「人に名を聞くときは、自分が名乗ってからじゃない？」

「ああ。失礼、失礼」

「でも、『名乗れ』『そっちが先に名乗れ』ってやりとり面倒臭くて、馬鹿馬鹿しくない？」

「おい！自分で言うておいてソレはねーだろー！」

「でも、キミもそう思うでしょ？素直に名乗ればいいのに」

「まあ確かに、普通にされたら軽くイラって来るな」

「てゆうか、ボク最初に名乗ってたよね」

「うおい！今までのこのやりとりは何だったんだ！？この無駄時間を返せ！！ついでに、何聞きたいか忘れたので状況説明して下さい！！」

「あっはははっ、キミ面白いね！」

「こっちや、笑い事じゃねえんだがな……………」

タメ息を吐いてうなだれる俺、それを見てアンゼルは気を取り直して、佇まいを直す。

すると、さっきとは打って変わって真面目な言葉が聞こえてきた。

「失礼しました、八幡さん。では現在、貴方が置かれている状況の説明を行いたいと思います」

あまりの変貌ぶりに、ベンチに正座で真面目に聞く。

「では、まず順番に説明いたします」

「は、はい」

「まず、貴方にぶつかって来た車ですが、貴方の他に酷い怪我の被害者は、いらっしやらないようです。」

「本当か！？」

「はい、お友達の香椎さんも貴方に突き飛ばされた時の擦り傷ぐら
いで、問題無いご様子でした。」

「そうか…良かったあー」

俺は心の底から安堵した。

あの時は急だったけど、最適な行動を取れたと思う。だがやっぱり不安があった。途中で意識が飛んだし、あいつ泣いてたから、どこか怪我でもしたんじゃないかと、実は恐々としていた。

俺が、心底安堵した（酷くマヌケな）顔をアンセルは微笑まし
そうなものを見る目でこっちを見ていた。

「……………何だよその顔」

「いえいえー別になんにもないですよー？」

絶対嘘だよ……………顔笑ってんじゃん

「それから、運転手の方も軽傷だそうで命に別状は無いそうです」

「あーそー、そりゃまあ良かったんじゃない？」

「……………？ それだけですか？」

「特に無いな」

んー、とか、うー、とか言いながらアンセルは考え込んでいる。

なんか変なこと言ったか？俺。

「……………ここから先は敬語やめるね」

「あ、ああ、わかった」

「自分を撥ねた相手のことを恨まないの？」

「あーそういうこと」「そういうことかー、

「普通は怒ったり、恨んだりするもんじゃないの？」

「まー普通は、車に撥ねられたら、怒ったりもするんだろーけど」

「けど？」

「……………俺が跳ねられた後、地面に横になって空見てたとき、運転手のおっさんの顔が視界の隅に見えたんだ」

「……………」

「そのおっさんの顔、普通に何処にでも居る顔で、何処にでも居る一般人だと思うんだ」

アン＝ゼルは訝しげに表情を歪め、こう続けた。

「それが、許せる理由になるの？」

「うーん、許せる理由っていつのじゃ無いんだけど……………」

「どういうこと？全然分からないよ？」

やっぱりコレじゃ説明になってないような……でも、自分でもはっきり説明できないし……よし方向転換。

「そんなことより、俺どーなってるの？ 体調絶好調だし傷跡も無いし、何か最先端の技術の手術でもしたのか？」

「あ、そうだった説明忘れてたね、ごめんごめん」

アン＝ゼルは、背筋を伸ばしコホンと咳払いをし、ひとつの宣告をした。

「八幡さん、貴方は車に撥ねられた後に、頭から地面に落ちてお亡くなりになりました」

「は？」

……えーとこいつは今……何て言った？……俺が死んだ？……はあ！？

「……………はあ！？」

「『ご愁傷様でした』」

アン＝ゼルは悲しそうな顔でそんな事を言った。まるで近い友人が死んでしまった時の様な、とても悲しそうな顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5954i/>

ゴースト?ストリート?ストーリー

2010年10月11日02時10分発行